慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	四つの可能な中国共産党史：党史研究上の諸戦略
Sub Title	Four possible histories of the Chinese communist party
Author	高橋, 伸夫(Takahashi, Nobuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2005
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.78, No.11 (2005. 11) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20051128-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

四つの可能な中国共産党史

——党史研究上の諸戦略——

高橋伸夫

問題の所在
一　革命認識に関する二つの次元
二　四つの解釈図式の概要
結　論

問題の所在

中国共産党史の研究は果たして進歩しているのだろうか。少なくとも、日本においては、いまや進歩について語るよりは衰退を、発展について語るよりは停滞を語るほうが適切かもしれない。この一〇年間を取ってみても、いくつかの注目すべき成果が現れたものの、全体として数が多いとはいえないし、研究者の数もほとんど増えていないようにみえる。新たな問題領域の開拓が力強く進んでいるようにもみえない——その間、利用できる資料は着実に増えていたにもかかわらず。[1] かくして、研究活動に一定の労働力を投入すれば期待できるはずの研究成

果と、現実の成果との間に大きなギャップが生じているように思われる。

なぜそのような状況が生じたかは、真剣に考えてみなければならない問題である。筆者の診断では、それはたんに研究者の怠慢や、歴史の「勝者」よりも「敗者」に心惹かれる傾向、さらには歴史よりは変化に富む中国の現状を分析するほうを好むという研究者の志向を持ち出せばすむ話ではない。この問題は、より本質的には、彼らの研究上の方向感覚の喪失と関連しているように思われる。そもそも、文化大革命以降、中国共産党（以下、煩雑さを避けるため、文脈上、中国共産党を指していることが明らかな場合には、共産党またはたんに党と書く）の公式の歴史に収斂するような中国革命史の描き方から脱却することが叫ばれながら、国民党もしくは国民政府の歴史のほうに多くの研究者が引き寄せられていった――そしてその状況は現在でも変わっていない――のは、それがすべての理由ではないにせよ、中国共産党史を当事者である共産党の「正統史観」から意図的に距離を置きつつ、どのように再構成するか、基本的な戦略を描くことができなかったことに起因すると思われる。[2]

研究者たちは「正統史観」に甘んじていたわけではない。だが、そうかといって彼ら自身の「修正主義」をいかに構築すればよいか思いつかなかったか、あるいはあえて考えようとしなかったか、そのいずれかであるようにみえる。あえて考えようとしない人々のなかには、公式の歴史から距離を取ることが、「反中国」の政治的姿勢と同一視されることを恐れる者、また政治的意味を重く背負わされた中国共産党史に嫌気がさし、政治的負荷のかからない――いうまでもなく相対的な意味においてであるが――研究分野に移動した者が含まれるであろう。

いずれにせよ、日本の研究者は中国における共産主義運動の歴史の研究路線について、有力な代替案を提示することに成功していない。それを逆から証明しているものは、恐ろしく豊かな細部を持つが、全体としてその研究が発するメッセージが必ずしも明らかではない研究の増大であろう。考察の対象となる時間はますます短くなり、考察の空間的範囲はますます縮小され、論文内には人名、地名、組織名、日付が氾濫し、読者はますます多

くの忍耐を強いられるようになっている。そして、これらの研究は、同一のまたは類似の研究テーマを手がける者以外の興味を引くことがますます少なくなりつつある。見方によっては、これらは研究の進展を物語る歓迎すべき徴候である。だが、問題はひとえにこれらの傾向が、研究路線に関する戦略的感覚を欠いたまま進んでいることにある。こうした諸傾向の行き着くところ、研究者たちは相互に孤立し、お互いの言葉を理解できなくなってしまう。したがって、いまわれわれに必要とされているのは、われわれ自身が何をいかに議論しているかに関する感覚を研ぎ澄まし、研究上の路線をもう一度自覚的に再構成してみることだと思われる。

この小論の目的は、中国共産党史の研究を行う際、どのような研究上の路線、あるいは戦略がありうるかをモデルとして提示し、今後われわれが研究を進めていくうえで、自らがどのような路線に立っているのかを自覚し、新たに研究戦略を練り直すための指針を作成することである。ここで中国共産党史という言葉は、しばしばそう理解され、またそれによって多くの人々をしり込みさせてしまうところの党内部の諸関係、とりわけ権力闘争とそれに伴う指導者の交替および路線の変化に関する記述と解釈を、したがって中国の現段階においては政治そのものの領域に踏み込んでしまいかねない事柄だけを意味しているわけではない。それは端的にいって、中国共産党と中国革命との関係の総体を意味している。すなわち、この言葉は、革命の舞台上で中国共産党に主役の座を与えたうえで、それが革命に関わる他の主体および客観的・物質的環境と取り結ぶあらゆる関係の記述、分析、および評価を指している。この未曾有の政治的・社会的変革の舞台上で、中国の共産主義者は物語の主役を務めるが、必ずしもつねに変革過程の主体だというわけではない。彼らは時に主体であるが、時に客体ともなり、また原因でも結果でもある。

可能な研究上の路線を構成する際、筆者はまず、それぞれが革命に関する基本的認識方法の違いを生み出す二つの異なる次元について考察する。次に、それらを組み合わせることで、四つの可能な中国共産党史の研究路線

の輪郭を描いてみようと思う。このような作業によって、歴史の物語（ナラティヴ）の紡ぎ方に関する、これまで無自覚に採用されてきた戦略、現在行われつつある戦略、そして今後可能となるかもしれない戦略の概要が浮かび上がり、比較に供されるであろう。[3] 筆者はここで主として二〇世紀前半に中国で生じた出来事を念頭に置いて、研究路線を構成しようと考えているが、研究路線によっては、このような時期区分を意図的に踏み越えることが必要となることがすぐに明らかとなるであろう。

一　革命認識に関する二つの次元

はじめに、筆者が組み立てようとする研究路線の構成方法を示すことにしよう。筆者が念頭においているのは、複雑で扱いにくいモデルを構築するよりは、輪郭がはっきりしていて、それゆえ相互に比較が容易なモデルのほうが望ましいであろう、ということである。そこで筆者は、これらのモデルを、いずれも歴史および政治・社会変動を考察する際に重要な視座となる二つの次元を組み合わせることで構成しようと思う。二つの次元とは、連続―断絶、および構造―行為者である。

第一の連続―断絶という次元は、トクヴィル（Alexis de Tocqueville）が、フランス革命を二つのまったく異なった角度から描こうとしたことに示唆を得ている。彼の第一の研究路線は、有名な『旧体制と大革命』という書物となって結実したが、フランス革命を歴史の連続性という角度から描こうとするものであった。[4] トクヴィルは革命の当事者たちの意図と、彼らが実際に演じた歴史的役割を峻別する。彼によれば、革命家たちは――もちろんフランス革命に限ったことではない――つねに彼らの事業を、歴史の荒々しい断絶―再出発として定義しようとする。だが、革命を通じて新たに生み出されたと称されるもののほとんどは、旧体制のなかに見出すことができるというのである。トクヴィルは革命に関する通念に逆らって、次のように述べる。「フランス革命からま

ったく新しいフランス国民が生まれ、それ以前にまったく存在しなかった基礎の上に大建造物を築いたと信じることはたいへんな思い違いとなろう。フランス大革命は、多数の副次的・二義的なことがらを生み出したが、主要なことがらの萌芽を発育させただけである。こうしたことがらは、大革命以前に存在していた。大革命が大きな原因となって事が始まったというよりも、大革命はその原因がもたらした諸結果を整理し、体系化し、合法化したのである。……大革命が成し遂げたことはすべて、すでに革命によらずとも成し遂げられていたと私は信じている。革命はただただ急激で暴力的な方法によって、政治状況を社会状況に、事実を理念に、法律を習俗に適合させたのである[5]」。こうして彼のみるところ、フランス革命は、アンシャン・レジームの延長線上に位置づけられる。あるいは、長期にわたる発展過程の頂点に位置を占めるのである[6]。この革命は、絶対王政が行ってきた貴族階級（アリストクラシー）を無力化しつつ行政的中央集権化を進めようとする努力、道路網の整備、関税障壁の撤廃、高等法院などの特権団体の無力化といった試みを継続し、完成に至らしめた。したがって、フランス革命は歴史の断絶を構成するどころか、反対に、歴史的連続性のなかで、またそれを通じてのみ理解が可能になるというのである。もう一度、彼の言葉を聞こう。「大革命は、どのみち結局は少しずつ成し遂げられるであろうことを、熱狂的で激しい努力によって、一挙に、用心もせず、何の配慮もなく急激に完成させたのであった[7]」。このような観点は、必然的にわれわれの眼を、一般に革命と称される比較的短期間のきわめて騒々しい時期にではなく、もっと上流にも下流にも引き延ばされた長期的な時間に向けることを促す。それは同時に、革命家が（民衆とともに）成し遂げたと誇らしげに称した事柄から、さらには革命家の言説全体から、意識的に距離を取ることをわれわれに要求している――逆に、この距離が極小化されていることが革命の「正統史観」の特徴を形作るのである。

トクヴィルの第二の研究路線は、これとは逆に、革命をフランス史の大きな断絶として描こうというものであ

った。この研究路線は、彼の第一のそれと違って、革命を、より短期間の人目を引く事件の連鎖のなかで理解するよう求める。また、過去と手を切り、歴史を再出発させたと宣言する革命家たちの視点や願望を共有するよう歴史家に迫る。革命を、観念や精神状態や習慣の急速な変化として描くこと――これが未完に終わった『旧体制とフランス革命』第三部の基本計画であった。フュレ（François Furet）によれば、トクヴィルはこうしたフランス革命をめぐる二つの大きな研究路線の間で、あるいは二つの基本的仮説の間で、絶えず揺れ動いていたのであった。(8)

もし革命を、社会的・経済的諸条件の長期的な変化の過程と短期的な政治過程との間の相互作用の劇的な組み直しとして理解できるなら、トクヴィルの上記のジレンマは、この組み直しを理解する二つの仮説を反映したものであるとみなすことができるかもしれない。ひとつの仮説は、トクヴィルの同時代人であるブランキ（Auguste Blanqui）にならって、革命をあたかもさなぎが殻を破る瞬間にたとえるものである。(9) すなわち、革命は長い時間をかけてゆっくりと成長してきた「さなぎ」（社会的・経済的諸条件）が、政治体制の「殻」を破る到来の瞬間にほかならない。ここでは、すでに生じている社会的・経済的諸条件の変化に適応できなくなっている国家が、暴力を通じて、新たにそれらに適合させられているのである。お望みなら、存在に著しく立ち遅れていた意識が、一挙に存在に追いついたのだといおう。(10) この事態は、革命の同時代人の目には、かつて経験したことのない変化が起こっているように映るが、ことの本質は継続にほかならない。長期の過程に短期の過程が暴力的に従属させられているのである。

とはいえ、革命の当事者たちは、この点を認めようとしないか、認識することができない。というのも、革命家たちはつねに時代の断絶―再出発を強調するからである。「自分たちは旧秩序にはっきりと終止符を打ち、新しい世界の誕生をもたらす一過程の代理人である」――これこそが「すべての革命の主役たちに取り付いた観

念」にほかならない。[11] 彼らが旧体制の目標や価値や制度を引き継ぐと自ら宣言することなどありえない（もしそう宣言するとすれば、彼らはたちどころに反革命の側に立ってしまうだろう）。「新しさのパトス」こそが、革命を反乱やクーデターから区別するのである。[12] したがって、革命を歴史の連続性から捉える観点は、事後的に長期の歴史過程を分析し、革命の長期にわたる「決算表」を作成してはじめて得られるものなのである。[13]

もうひとつの仮説は、「殻」は内側の諸条件（社会的・経済的諸条件）とはほとんど関わりなく、ひとりでに破れ、有無をいわさず発展過程に強引な再出発を命じているとみる。この場合、革命とはそこから社会的・経済的諸条件の変革が生じる長い過程の始まりとなるであろう。ここでは、権力の作用によって、長期の過程が短期の過程に従属させられている。この力ずくの再出発によって、歴史が革命前と革命後に切断される。この裂け目の様子を理解するためには、革命の指導者たちの企図と実践に目を向ける必要がある。なぜなら、彼らはあらかじめこの歴史的亀裂を設計していた（と称する）からである。したがって、このような革命の理解は、第一のそれとは異なり、革命家たちの観点と実践に、歴史家たちが寄り添うことによって可能となるであろう。

革命に関する以上の二つの基本的認識方法は、はっきりと分離できそうにない。それは同時代人の眼に、そのいずれの過程が生じているにせよ、かつて経験したことのない変化が生じたと映るからだけではない。両者が裏腹の関係にあるからである。というのも、国家はつねに一方で社会・経済構造の変動に適応しつつ、他方でそれを自らに適合させるであろうから。したがって、いかなる革命の研究も、以上の二つの視点を同時に導入する必要があるのだが、それでも観察者はそれぞれの関心に応じて（あるいはイデオロギー的・政治的見解に応じて）、連続と断絶のどちらかに力点を置くだろう。そこで、まず連続―断絶という次元を設定してみようと思う。

もうひとつの次元もまた、政治・社会変動を考察する際に必ず問題となる点である。すなわち、構造―行為者（アクター）という次元である。ここでの問題は、革命を社会・経済構造（ここにはマクロ経済、世界システム、生

産関係、階級および階級間関係が含まれている）によって運命づけられた必然の産物として描くのか、それとも社会・経済構造とはほとんど無関係に、あるいはそれに逆らって行為者たちが作り上げるものとして描くのかということである。言い換えれば、「起きるものとしての変化」と「起こすものとしての変化」のどちらを重視するかという問題である。前者の観点に傾く場合、革命の過程は、「自然に」始まり、あたかも自動制御されているかのように、不可避的かつ不可逆的に、あらかじめ定まった目的地にひとりでに向かうものと理解されるであろう。この目的論的な歴史の理解においては、起源の分析と革命過程の分析は抱合関係にある。[14] なぜなら、革命家の目標、計算、および価値は構造から演繹され、それに還元されてしまうからである。したがって、革命家の意図も行動もあらかじめ構造によって決定されている。彼らは、結局のところ、構造の代理人にすぎない。すべては自動的に始まり、進行し、そして収束するであろう。

後者の観点を採用する場合、革命の起源にかかわる分析と革命の過程（発生から、大衆の動員、暴力的紛争の激化、権力の移動、新たな制度や象徴の創出とその再生産にいたるまで）にかかわる分析とは分離されることになる。[15] というのも、革命の過程は、人間の意志の力や偶然や突発的な事態に開かれているものと理解されるからである。革命の起源がどうであれ、事件（あるいはその連鎖）としての革命の展開には別の力学がつきまとう。革命の過程においては、革命家たち自身のものを含めて、さまざまな私的利害が葛藤を演じることになるであろう。そのうえ、予期せぬ事態が革命家たちをいたるところで待ち構えているであろう。そのため、彼らは首尾一貫した行動を取ることができない。こうして、革命の過程は革命家たちの統制をはみだし、彼らの期待を裏切り、彼らの目算を無に帰さしめる。それは、大いなる不確実性のなかで、あるいは予測可能性がごく限られた状況下で、あたかも手探りで新しい秩序を構築するかのような手間のかかる仕事としてイメージされる。歴史家はこの過程を、あたかも結末を知らないかのように描いてゆくだろう。また、革命家がその過程で直面した困難なジレンマ、見

過ごされた転換点、そして将来に持つ意味を理解することなく行った選択を再現しようと努めるだろう。人間の意志と実践こそが歴史の運行にとって決定的な作用を果たすと理解すること――ある意味で、「陰謀史観」に通じる――が、この観点の核心なのである。

以上のような革命の起源と展開をめぐる基本的な発想の違いは、周知のように、社会主義者を理論においても実践においても多年に渡り執拗に分裂させてきた戦術上の諸論争の背後に存在したものである。[16] こうした発想の相違は、近年の民主化の政治社会学をめぐる論争のなかにもこだましている。実際、一方で民主化を可能にする客観的な政治的、経済的、社会的、文化的諸条件とその組み合わせを特定することが試みられているが、他方でそれらの諸条件を、民主化を運命づける構造的条件として扱うのではなく、民主化をあくまでその過程に関与する人々の意志と行動の次元に関連させて理解すること、さらに民主化の「移行」(transition) 段階と「定着」(consolidation) 段階を区別し、前者の態様が後者に与える影響を吟味することが試みられている。このような問題設定は、すべて革命の研究に通じるものを持っている。

こうして得られた二つの次元を組み合わせることで、以下の四つの解釈図式、ないしはモデルを構成することができる。第一の図式を、仮に、構造―断絶と呼んでおこうと思う。第二は、構造―連続である。第三は、行為者―断絶である。そして第四は、行為者―連続である。次に、各解釈図式の概要について述べよう。いうまでもないことだが、これらは抽象度の高いモデルであって、現実に行われた個別的な研究が――筆者自身のものを含めて――そのうちのひとつにぴたりと当てはまるわけではない。実際には、多くの個別的研究は、筆者が示すいくつかの解釈図式の混合形態として現れるだろう。筆者の関心は、ある前提に従って、いくつかの比較可能な解釈の体系を構成し、それに従うとどのような歴史の描き方の違いが現れるかを明らかにすることにある。このような作業によって、直ちに具体的な歴史叙述が生み出されるわけではないが、それでも研究計画を練る際に研究

者が自ら現在立っている地点を確認し、代替的進路の存在を視野に入れつつ次の進路を決定するための「作戦地図」として有益であると信じる。

二　四つの解釈図式の概要

第一の構造―断絶モデルにおいては、まず旧社会の構造上の諸矛盾に焦点が当てられ、これらの矛盾の必然の分泌物としての革命家集団の登場が語られる。次に、この集団が、いわば歴史を味方につけて、政治・社会・経済・文化のあらゆる領域に根本的な断絶を持ち込む努力が記述される。そして、基本的に彼らの意図と計画どおりに新しい制度と文化が創出される様子が描かれるのである。それによって、革命は歴史の明瞭な分水嶺を形作ることになる。この前には「伝統中国」があり、後には「新中国」がある。この解釈図式を特徴づけるのは、革命という事件の必然性と時代の断絶である。(17) 歴史家たちはこの図式において、必然性の言葉で語るであろう。あたかも、最初の一撃で動き出した過程が、「見えざる手」に導かれて、宿命的に定められた目標地点に向かって進んでいくかのように革命を描くのである。また彼らは、歴史的使命を授けられた革命家たちが、自らの意図や計画や願望をほとんどそのまま貫徹していく過程として革命を叙述するであろう。その過程において、革命家たちが果たした客観的役割とは、まさに彼らが当時果たそうと望んでいた役割にほかならない。そのかぎりで、歴史家は革命の当事者たちの意識に寄り添い、彼らの死後の代弁者を引き受けることになる（そして、もし「革命政権」が生存し続けているとすれば、歴史家は自らの仕事に濃厚な政治的・イデオロギー的色彩を添えることを覚悟しなければならない）。

中国共産党の歴史においては、中央委員会あるいは政治局会議、あるいはその他の重要会議（われわれはもちろんコミンテルンの果たした役割を忘れるわけにはいかない）が、革命家たちの意図とそれを実現するための戦略を

定式化する場となるため、各重要会議での討論および決定事項を辿ることが、歴史家の主要な仕事となるであろう。つまり、この解釈図式においては、革命家集団の頂上部分から発せられるメッセージこそが、革命を理解する鍵となるであろう。なぜなら、そこでの決定事項は基本的にそのまま現実となり、革命の各段階を形作るものと想定されるからである。例えば、一九三〇年六月の政治局会議が李立三に代表される「左傾冒険主義」の指導に道を開き、同年九月に開催された第六期三中全会はそれに歯止めをかけ、そして翌年一月に開かれた第六期四中全会がそれを清算する――王明らによる新たな「左傾路線」の幕を開けるとともに――という具合にである。

この解釈図式においては、革命家集団は基本的に均質である。彼らは、歴史が彼らに与えた崇高な使命を遂行するために同じ方向を向いて整列している。そして、この集団が、あらかじめ革命への意志を社会・経済構造によって植えつけられた大衆――ここでは、大衆の革命への意志は与件となっている――と幸福な同盟関係を結ぶのである。つまり、党と大衆との間には自然な基本的利害の一致が存在している。その限りで、歴史家は革命運動の過程を跡づける際に、革命家集団の頂点に焦点を絞ればよいであろう。この集団が均質であるからには、その頂点から発せられる言葉に注目すればこの集団の意図と計画が理解できるし、また共産党と大衆の利害が一致しているからには、大衆の願望と行動は、彼らの内面に立ち入らずとも、革命指導者の言葉によって説明できるからである。要するに、革命家集団の意図と革命の現実との間に大きな屈折が存在することは想定されていない――逆に、この両者の間に存在するあらゆる屈折に目を向けることが、後に述べる第三モデルの特徴を形作る。

また、革命家集団は全体として致命的な過ちからは免れている。構造がいわば「隠れた神」として彼らを勝利まで導く限り、彼らがそのような過ちを犯すはずがないからである。革命家たちが犯した数々の判断ミス、彼らが被った挫折や敗北は、結局、正しい道に戻ってくることになる一時的な回り道にすぎない。すべては自動制御されている。そして、このような回り道は、いかんともしがたい環境の厳しさや、旧い社会の思想や習慣の影響

を受けた一部の分子が党の前に立ちはだかることによって余儀なくされたものなのである。要するに、革命過程の一時的な――あくまでも一時的な――停滞と逆戻りは、革命家集団（およびそれに付き従う大衆）の外部にある要因によって説明されるであろう。それらの要因は決して革命の進行そのものを止めることができない。この解釈図式において、革命家集団は勝利に向かって、総じてみれば平坦な道をまっすぐに歩む。歴史家は結末のあらかじめ定まったこの幸福な進軍の、いわば好意的な従軍記者として振舞うであろう。

そうであるがゆえに、この解釈図式は、革命を阻むさまざまな要素――指導者の判断の誤り、革命家集団からの離脱者、反革命集団、革命陣営と反革命陣営の間を日和見主義的に往復する人々など――を軽く扱ってしまいがちである。例えば、国民党はどう理解されるだろうか。国民党には、他の反革命集団や「裏切り者」と同様、あらかじめ敗北を運命づけられた闘技場しか用意されていない――もっとも、革命の英雄叙事詩を書くために、彼らの存在は着膨れさせられ、その強さはある程度強調されるのだが。彼らはあたかも屈服させられるためだけに、あるいは除去されることによって革命家集団の栄光を増すためにだけ歴史の舞台に登場してくるかのようである。国民党は構造の命じるところに逆らって、社会的・経済的諸条件の変革を阻むがゆえに自ら滅亡する道を選ぶのである。反革命集団と「裏切り者」は革命の舞台において幕間劇を演じるにすぎない。

さらに、この図式は革命の地域的偏差についてもわずかしか語らない。というのも、革命家集団の頂点から発せられる指令が、ほとんど何ものにも決定的に妨げられることなく現実に翻訳されると想定されることから、その指令の及ぶところどこでも同じような過程が生じるであろうから。この解釈図式においては、革命は単一の過程であり、それが波及するところ、均質な過程が進行するのである。

これは中国共産党の公式党史の――そして日本で書かれた多くの中国革命史の教科書の――基本的な描き方に近い。最も権威ある党史である中共中央党史研究室編『中国共産党歴史』上巻においては、共産党が誕生する以

前の、とりわけ辛亥革命以後の労働者階級の成長に関する記述に、多くのページが割かれている。そして、共産党はこうした労働者階級の発展の必然として五四運動後に歴史の舞台に登場してくる。[18] やはり中共中央党史研究室が編集した上記の書物に関する解説書は、次のように述べる。「中国共産党が一九二一年に、半植民地・半封建の中国に誕生したのは偶然ではなく、近代中国社会の発展の必然的結果である。辛亥革命から五四運動に至る時期、中国の社会・経済・政治の発展は、中国共産党の誕生のために必要な条件を生み出した」。[19] 革命は歴史的必然であった。たんなる社会改良では帝国主義と封建主義という互いに手を取り合った二人の強大な悪者に戦いを挑むには不十分であった。この革命家集団は、当然のように大衆を難なく味方につけ、いくつかの挫折を味わいながらも、結局は歴史に導かれて勝利を収め、旧い中国社会と根本的に手を切る――このような様子が描かれる。共産党も時には無視できない誤りを犯すが、この誤りは必ずや適切に処理され、それがまた革命家集団の正しさを証明していると主張されるのである。例えば、日中戦争中の一九四三年に党が起した大量粛清事件である搶救運動に関する党自身の弁明をみよう。「搶救運動の誤りが時宜を得て正されたこともまた、中国共産党がマルクス主義によって武装された中国労働者階級の先鋒隊であり、それが誠心誠意人民につくし、自己批判のよい作風を持っており、そうであるがゆえに自己の誤りを自ら克服することができることを示している」。[20]

おそらく、今日の日本の中国革命史研究を特徴づけるいくつかの傾向も、こうした構造―断絶モデルの無意識的な受容（中国共産党に批判的でないことの証としての意図的な受容ももちろんありうる）と関係があると思われる。筆者が思い浮かべているのは、例えば、国民党支配地域と共産党支配地域の分離、したがって国民党史と共産党史の分離、一九四九年以前とそれ以降の時期の分離といった傾向である。これらの分界線に沿って、ほとんどの研究プロジェクト、研究集会、さらには大学院生の教育プログラムが組織されている。これらの傾向はすべて一九一九年（あるいは一九二一年）から一九四九年の時期を、また中国共産党が統治した空間を、中国がその過去

と絶縁した特別かつ運命的な時期とみなし、それを暗黙のうちに寿ぐという態度から来ているように思う。このモデルは、中国史に劇的な断絶が生じたと称するこの限られた時間と空間の分析に特権的地位を与えるであろう。しかもこの分析は、変化の緩慢な社会・経済・文化領域よりも変化しやすい政治・イデオロギーの領域を好んで描き出すであろう。

第二の構造―連続モデルにおいては、第一モデルと同じように、まず構造上の矛盾に焦点が当てられる。次に、こうした矛盾の必然の産物としての革命家集団の登場が語られるのだが、この集団が、意図せずして、すでに始まっていたプロジェクトを引き継いで完成にもっていく様子が描かれる。ここでは、歴史家はすでに述べたトクヴィルの精神にならって中国革命に関する基本的仮説を作り上げることになるだろう。[21] したがって、革命を通じた根本的な歴史の断絶が語られることはない。そのかぎりで、革命はその始まりも終わりも、はっきりとした日付を確定することが困難な出来事となる。だから、「伝統中国」と「新中国」の境目ははっきりしなくなる。革命は比較的長期の歴史過程のなかに埋め戻される。この解釈図式において、歴史家たちはバトンが引き継がれるリレー競争のイメージを浮かび上がらせるであろう。彼らは、革命家が主観的に成し遂げたことではなく、リレー競争終了後の、長期に渡る変動の客観的な決算表作りに主たる関心を向けるであろう。ここでは、革命の指導者たちが当時抱いていた目標、価値、および彼らが自らに与えた役割と、彼らが果たした客観的な歴史的役割の間に一線が引かれているのである。フュレの表現を借りれば、この解釈図式には「革命の自己幻想と判断されるものに対する批判」が含まれているのである。[22] ここにおいても、革命家たちは第一モデルと同様、概して平坦な道を直線的に歩む。歴史的使命を帯びたバトンの引継ぎ――それはあくまでも意図されない引継ぎである――は、後に述べる第四モデルとは異なり、無理なく円滑に行われるであろう。歴史的使命のかつての担い手は、新たな担い手にそれを引き渡し、どちらかといえば静かに舞台から退場するのである。また、均質な革命家集団と、そ

れを万雷の拍手をもって歓呼して迎える大衆、したがって両者の間の自然な同盟がこの図式を特徴づけている。だが、歴史家からみて、彼らが現実に辿った道は、彼らが辿ったと考えた道とは別物なのである。

このようにいえば、直ちに疑問が提起されるかもしれない。中国共産党は意図せずして国民党のプロジェクトを引き継いだのではなく、まさに意図的に継承したのではなかろうか。事実、共産党は二度に渡る国共合作時に孫文の三民主義を賞賛し、毛沢東も一九三八年秋には、三民主義を日中戦争期だけでなく、戦後の国家建設の綱領として位置づけたのではなかったか。[23] なるほどそうではあるが、この賞賛が共産党と国民党との関係の変遷において現れては消え、共産党の勝利とともに最終的には消滅したことからすれば、[24] それが共産主義者の計画のなかにもともと含まれていたというよりは、政治的戦術をめぐる考慮から出たものとして扱うほうがよいであろう。

同様に、現実の政治的要請から、中国共産党を辛亥革命期のブルジョア革命家の後継者とする――国民党を差し置いて、正統なる継承者とする――言説が再生産される。実際、一九六一年に周恩来は、辛亥革命五〇周年を記念して、「われわれが辛亥革命の英雄たちの未完成の事業を完成させ」たと述べたが、その二〇年後に胡耀邦が新民主主義と社会主義の勝利は「辛亥革命の継続と発展」であると述べ、またその一〇年後に楊尚昆が、さらにその一〇年後に江沢民が同じ趣旨の発言を繰り返した。[25] 現在の言説も基本的に変わりはない。例えば、胡繩のみるところ、五四運動から一九四九年までの歴史的な課題は、ともかく資本主義を発展させることにあったのであり、この観点から、国民党の統治時期に資本主義の道を歩もうとした人々――例えば、胡適――の役割を正当に評価してやるべきなのである。[26] そして、彼によれば、国民党はこうした歴史によって与えられた課題を達成することができなかったために歴史に見放され、一方、共産党は本来、国民党が解決すべきこの課題を達成したために最終的な勝利を勝ち取ったというのである。[27] もっとも、自らを孫文の、あるいは辛亥革命期のブルジョア革命家の後継者に位置づける議論が、政治的要請と緊密に結びついていることを中国の歴史家は隠していない。張

海鵬は次のように率直に述べている。「辛亥革命を記念することと祖国統一の現実的任務を緊密に結びつけて、中華民族の最も広範な愛国統一戦線の設立と関連させることは、現実の政治が求めているものであり、これこそが現実の政治である」[28]。ともあれ、中国共産党がブルジョア革命の課題を自ら引き受け完成にもってゆく――もちろん、ブルジョア革命はいわゆる新民主主義革命に転化させられるのだが――長期の物語が、革命の当事者およびその後継者によって語られている。

だが、繰り返すが、歴史家が関心を持つのは、革命家たち（およびその後継者たち）の主観から、あるいは政治的意図から紡ぎ出された言説ではなく、長期的観点からみて革命家たちが客観的に成し遂げたことなのである。おそらく、第二モデルを採用する歴史家たちは、革命の当事者によって二重にひねられた現実のイメージを元に戻そうと試みるだろう。すなわち、歴史家たちは、（一）共産党がブルジョア革命家の正統な後継者と称しているが、それは彼らの政治的戦術から出たもので、彼らの本心から発したものではないこと、（二）だが、その本心とは逆に、彼らはブルジョア革命家たちの事業を引き継いでしまう、という二つの点を基本に据えて、ブルジョア革命の課題が革命派、国民党、共産党という具合に引き継がれながら達成される長期の過程を語ることになるだろう。このいわば「引き伸ばされたブルジョア革命」という物語は、歴史の上流に向かって引き伸ばされることもあれば、下流に向かって引き伸ばされることもあるだろう。後者の例として、メイスナー（Maurice Meisner）の論文をあげることができる。彼は文化大革命の時代の終わりまでの歴史を総括して、結局のところ、毛沢東は政治的には失敗したが、資本主義の発展に有利な近代的経済基盤を築くことに成功したという。そして、中国革命は皮肉にも、ブルジョアジーを不倶戴天の敵とみなす共産党によって推進されたブルジョア革命だったと規定するのである。メイスナーの指摘によれば、「現在の見地からすると、中国の共産主義革命は本質的に、世界でもっとも人口の多い土地にダイナミックな資本主義システムを成長させるための基礎を据えたブルジョア

革命だったと結論することが妥当であろう」[29]。つまり、彼は共産党が達成した成果が、実は彼らが全精力を傾けて否定しようとした当のものだったと主張しているのである。

溝口雄三氏は一八四〇年のアヘン戦争から始まり、二一世紀中葉までに至るもっと長い中国革命を展望している。彼のみるところ、この「革命」――ここまで来ると、もはやこの用語に執着する必要はないように思われるのだが――は一八四〇年から一九一一年までの「生起期」、一九一一年から一九七八年までの「盛行期」、および一九七八年から二一世紀中葉までの「進展期」という三段階を辿るが、全体として二千年来の王朝体制の統治理念を継承しつつ、それを倒壊させるという転換を成し遂げたのである[30]。

この「引き伸ばされたブルジョア革命」、あるいは「長引いた王朝体制からの転換過程」という物語のなかでは、必然的に共産党が成し遂げた成果はこの長期の過程のなかに埋没してしまい、その特異性は目立たないものになるだろう。第一の解釈図式において、共産党は唯一の英雄であるが、第二のそれにおいては、英雄の称号を独占することはできない。しかも、この英雄はもともと意図していなかった成果をあげたおかげでその称号を手にしているのである（そうであるがゆえに、この解釈図式は共産党の支配の正統性を際立たせることができず、共産党支配下の中国において主張されることがあっても主流になることはあるまい）[31]。かたや国民党は、あたかも歴史的使命を最終ランナーとしての共産党に引き渡すためにだけ歴史の舞台に登場してきた端役のような、どこか物悲しい存在として描かれる。主役の交代は構造の命じるところによって、自然に生じたのである。だが、それだけに、この解釈図式は、国共両党の間で生じた長期に渡るきわめて暴力的で血腥い権力闘争を周辺に追いやってしまう。毛沢東と蔣介石は、結局のところ同志であったかのようである。歴史家は、この幸福な継走に付き添う実況記者ではない。観察対象――バトンを引き渡す側と引き渡される側の双方――に対する好意的なまなざしは失われてはいないが、その画像を遠くから眺めている解説者なのである。ともあれ、ここでは共産党が独自に成し遂げた

ことよりも、二〇世紀初頭（さらに一九世紀後半にまでさかのぼるかもしれない）から後半まで（さらには二一世紀まで）を含めた長期に渡る変動の決算表作りが問題になっている。そのかぎりで、第二モデルは、第一モデルと比べて長い時間幅の分析を歴史家に要求するし、また空間的にも、より広域的な分析を促すであろう。さらに、変化の激しい政治・イデオロギーの領域よりも、変化が比較的緩慢な社会・経済・文化領域での変化に目を向けることを迫るであろう。

さて、第三の行為者―断絶モデルにおいても、革命家集団の主観的意図・計画と彼らが実際に達成した成果とがはっきりと分離されている。だが、第二モデルとは異なり、歴史家は比較的短期間における事件の連鎖に焦点を当てるであろう。この解釈図式のなかでは、共産党は、社会・経済構造が革命には必ずしも適さなかったにもかかわらず、あるいは構造を向こうに回して、意図的な断絶を中国社会に強引に持ち込もうとする存在として立ち現れる。革命を、困難な客観的諸条件のなかで始めた人間の企てとして理解すること――これがこの図式の核心である。革命の過程は不可避的に進行するわけでもなければ、不可逆的に進むわけでもない。したがって、革命家集団の勝利はあらかじめ保証されてはいない。この向こう見ずな企てのなかで、共産党は無数の障害物、突発的な出来事、および困難なジレンマに直面するだろう。革命家集団の行く手に平坦な道は用意されていない。当然のように、彼らの当初の目標は縮小され、計画は修正を余儀なくされる。そこで、彼らの意図と現実の間で大きな乖離が生まれ、彼らは大いなる苦悩を強いられる。共産党はやすやすと勝利を手にするわけではない。大きな代価を支払い、いくつもの曲折を経た末に、かろうじて勝利に辿りつくのである。その意味で、この図式において、共産党は英雄であることを失わないが、孤独で、疲れ果てた悲劇の主人公の顔を持つ。歴史家は革命家たちのこのような苦難に満ちた進軍の、いわば疑い深い従軍記者として振舞うであろう。この記者は、軍司令官の発表や説明に耳を傾けることはあっても、決してそれらを真に受けない。彼は徹底したリアリズムの精神を持

って、実際の戦場で何が起こっているかを執拗に再現しようとするであろう。

また、この解釈図式において、歴史家たちは革命家集団が均質であるどころか、同床異夢であることを浮かび上がらせるだろう。ある特定の構造から分泌されたものでない以上、行為者たちが独自の願望や利害や計算を革命のなかに持ち込むことは当然だからである。さらに、革命家集団と大衆も自然な同盟関係を結ぶわけではない。大衆の革命への意志は与件ではなく、したがってこの両者の幸福な結婚は、別に構造によってあらかじめ運命づけられてはいないからである。そこで、歴史家は革命家集団が、農民や労働者と取り結ぶ不安定で移ろいやすい関係を強調するであろう。あるいは、この集団が時には利益の供与によって、時には露骨な強制という手段によって――言い換えれば、革命が標榜する理想主義に反する手段によって――大衆に自分たちの意思を押し付ける側面を探すことになるだろう。

さらにいえば、国民党や「裏切り者」たちも、はじめから敗北を運命づけられているわけではない。彼らもまた独自の展望と計算を携え、革命家集団と平等なチャンスをもって闘技場に威風堂々と姿を現すのである。つまり、この図式のなかでは、革命過程はさまざまな主体が、さまざまな目的と計算をもって押しのけ合い、ひしめき合う本質的に方向の定まらないものとなり（歴史を一定の方向に誘導する「見えざる手」など存在しないからである）、そのなかを革命家集団が苦労して勝ち抜いてゆき、社会を再出発に導くものと認識されるのである。したがって、この解釈図式を採用する歴史家は、第一モデルと異なり、革命の過程を描く際に、革命家集団の頂点に注目するだけではすまなくなる。同時に、革命過程が空間的に均質だとみなすわけにもいかなくなる。革命集団と「扱いにくい」大衆の相互作用は、各地方に固有の社会的、経済的、文化的諸条件によって異なった様相を呈するであろう。革命はもはや一枚の均質な織物ではない。むしろ、それはさまざまな布地を寄せ集めたパッチワークなのである。したがって、歴史家の仕事は、はるかに複雑なものとならざるをえない（とはいえ、「分析の経

済」の観点からして、歴史家はパッチワークのなかの一枚か二枚の布地しか扱うことはできないかもしれない）。

以上の意味において、この第三モデルは強烈な修正主義的性格を持つ（だから、このモデルは、第一モデルとは逆のイデオロギー的・政治的電荷を帯びる）。このモデルを採用する歴史家は、革命家の言説と革命過程の現実の区別から出発して、党による革命過程の制御よりは制御不能の諸側面を、そして共産党の勝利に向かう着実な歩みよりは革命過程の不確実性を、そして党と大衆との強固な同盟よりは両者の複雑で不安定な関係を描き出すことに精力を傾けるだろう。要するに、革命家集団は自由な行為者であるが、革命のなかで彼らの自由になるものは何ひとつとしてない。この集団は、革命の過程で直面する多くの要素を自らの願望と計画の下にひざまずかせることができない。彼らはつねに何かに適応を迫られる存在である。

こうした研究路線に近い作品に、例えば晋察冀辺区における革命を描いたハートフォード（Kathleen Hartford）や華中における共産主義運動を扱った陳永発の研究がある。[32] その著作の題名からも伺えるように、彼らにとって、共産党の勝利はあらかじめ運命づけられたものではない。そうではなく、革命は地域固有の諸条件のもとで、その推進主体――必ずしも統一された意志のもとに置かれていない――が一歩一歩苦労しながら作り上げるものなのである。

このような研究路線が抱える特有のジレンマについても触れておかなければならない。この解釈図式において、歴史家はあたかも物語の結末を知らされていないかのように、あるいはフィナーレに持ち込むことをためらうかのように革命の過程を描いてゆく（第一モデルにおいては、逆に、実際に起こった結末からすべてが逆算されてしまう）。この過程はどこまで行っても整然とせず、共産党の勝利は未来の予定表にせいぜいぼんやりと浮かんでくるにすぎない。天秤の腕は、いつまでたっても安定しない。その代わり、歴史家は共産党が直面した数々の困難を再現し、いかに彼らが革命の過程を制御できなかったかを強調するのだが、そうすればするほど現実に起こっ

た結末――すなわち最終的な共産党の勝利――と辻褄が合わなくなってしまうのである。アナーキーな状況のなかから、共産党の勝利はどのように浮かび上がるのであろうか。その際、歴史家は物語を締めくくるために、構造的必然性の言葉を用いることなく、大いなる不確実性のもとでの革命家の選択や機転、偶然の恩恵や敵の自滅といった要因を強調せざるをえなくなるであろう。あるいは、ハートフォードがそうしているように、共産党の動員できる資源がこれまで考えられてきたものよりもはるかに限定的であったとはいえ、それで十分だったと強弁することになるだろう。(33)

もうひとつのジレンマは、この解釈図式が革命の物語を際限のない空間的多様性のなかに解体してしまう可能性をはらんでいることである。第一モデルとは異なり、革命過程はもはや単一でもなければ均質でもない。各地域固有の社会的、経済的、文化的諸条件に応じて、革命家たちはさまざまな戦略を用いながら大衆を革命過程に引き込もうと試み、そしてさまざまな性格を持った同盟（あるいは敵対）関係ができあがるであろう。こうして、無数のミクロの物語への誘惑が歴史家たちを待ち構えている。ここでもまた歴史家は、新たな発見の大いなる可能性と引き換えに、規定の結末がどのように生じたのかの説明に、大いなる苦悩を強いられることになる。その意味で、第三モデルは革命家集団に対してだけでなく、それを描く歴史家にも困難な道を用意するであろう。

最後の行為者―連続モデルにおいて、共産党は第三モデルの場合と同様、社会・経済構造が革命には必ずしも適さなかったにもかかわらず、断絶―再出発を中国社会に強引に持ち込もうとする存在として姿を現す。構造という「隠れた神」の導きがないために、彼らもまた障害物だらけの曲折した道を苦労して辿ることになるであろう。革命の過程は、やはり不可避的でもなければ不可逆的でもない。それはいくつもの可能性がせめぎあう領域である。革命家集団は、闘争なくして一歩も前進することができない。彼らは決して一枚岩の集団ではないし、大衆もまた彼らの大それた企てに無条件で手を貸すような自然な同盟者などではない。かくして、共産党はある

場合にはさまざまな「社会的交換」の試みを通じて、別の場合には力ずくで大衆から革命のための資源を動員しようとするであろう。ところが、苦労に苦労を重ねた末、彼らが成し遂げたと思っていることは、客観的には旧体制の事業の延長でしかない。したがって、革命家たちは二重の不幸を背負い込んでいる。歴史家は、第二モデルにおいては、共産党を国民党（あるいはそれ以前の権力主体）が進めていたプロジェクトの自然な継承者として描くのだが、この第四モデルにおいては簒奪者、もしくは横領者として描くであろう。それによって、この解釈図式は、国民党を歴史的使命を強奪された悲劇の主人公に仕立て上げる一方、共産党を喜劇役者におとしめるであろう。というのも、この場合、共産主義者は苦労の末に打倒した敵の事業を意図せずに自ら引き継いでしまうからである。その意味で、この解釈図式によって描かれる歴史の舞台に英雄は不在である。

共産党が社会・経済構造の助けを借りることなく（もっとはっきりいえば、階級関係に支えられることなく）、もっぱら意志の力によって権力闘争を勝ち抜いたと示唆するばかりでなく、同時に中国史を再出発させたのではなくそれに連続性を与えたと示唆する点において、この解釈図式が共産党支配下の中国で受容される可能性はほとんどない。この図式は共産党の公式の歴史を裏返しにしたところの、国民党の公式の革命史に接近してしまう。実際、第一モデルが共産党の「栄光を讃える理論」となるのに対して、第四モデルは国民党にとって「慰めの理論」を提供するだろう。それによって第四モデルは、第三モデルと同様、現実に生じた誰もが知っている物語の結末――すなわち、共産党の勝利――との不調和という難点を抱え込むことになる。なぜ、歴史的使命を手中にしていたはずの国民党は、それを社会・経済構造の支援を受けていない共産党によってむざむざ奪い取られてしまったのだろうか。「見えざる手」の助けを受けていないはずの共産党の強さの根源はどこにあったというのだろうか。この点を説明するために、歴史家は国民党の判断の誤りや意思の不統一、偶然の作用や外部からの不幸な介入（これは現実に存在した）、さらには共産党の「姦計」といった要因を持ち出すことになるだろう。[34] この解

釈図式を採用する歴史家にとっての困難はこれだけではない。なぜ社会・経済構造の代理人ではない共産党が、主観的には歴史を断絶―再出発させようと懸命に努力しながら、結局のところ国民党のプロジェクトを引き継いでしまうのかを説明するのが難しいのである。この図式は、歴史家に、一方で共産党の勝利への困難な道程に伴う無数のミクロの物語をリアリズムに徹して再現するよう要求しながら、他方でそれらを革命の最終的な決算表作りというマクロな物語に接続するよう迫る――しかも、その接続はどうみても容易ではない――のである。こうして、この解釈図式は歴史家の視座を引き裂いてしまう。その意味で、第四モデルは歴史家に第三モデル以上の苦労を強いるであろう。

結　論

これまで、中国共産党史をいかに描くかについて、四つの可能な異なる解釈の体系の輪郭を示してきた。これらの解釈図式は、研究者にとって、歴史の分析―叙述を進める際の指針ともなるし、陥穽のありかを指し示す警告ともなるであろう。筆者はこれらの図式に優劣の順位をつけようというつもりはない（おそらくそれは不可能である）。というのも、四つの解釈図式は、半ば相互に対決しているが、半ば相互補完的であるように思われるからである。またこれらが可能なすべての解釈の体系だと主張するつもりもない。それでも筆者は、過去および現在の日本における研究状況から判断すれば、これまでの研究のなかで支配的地位を占めてきた第一モデル――それは他の解釈の諸体系との慎重な比較のなかで戦略的に採用されたものではなく、無自覚に採用されたものである――からしばらく意図的に離れて、第三モデルによる研究成果を蓄積すべき時期が来ている、と主張したいのである。というのも、構造―断絶モデルが採用する歴史の書法の戦略を描いた際に明らかとなったように、このモデルには、どうしても革命を指導者集団の頂点から眺めるエリート主義的色彩が付きまとうからである。第一の

（および第二の）解釈図式のなかで大衆はどのように扱われるだろうか。これらの解釈の体系が、基本的に、構造を味方につけた革命家集団が自己の願望と計画を歴史の必然として貫徹していく様子を描く限り、この集団と大衆の間に予定調和があったと前提することになる。すると、もっぱら党に積極的に呼応して、大衆の先頭に立ち、変革を担おうとした人々を描くことになるだろう――例えば、労働運動や農民運動の積極分子をである。そうなると、かつてホブズボーム（Eric Hobsbawm）が労働運動史の文献に対して下した次のような評語がここでも意味をもつ。「彼ら〔社会主義者の歴史家を指す――高橋〕は普通の人々なら誰であれ研究の対象にしようとするのではなく、労働運動の祖先とみなすことができる普通の人々を研究したいと思ったのだった。つまり、労働者そのものではなく、チャーティストや組合運動家や戦闘的な労働者を。そして、これも自然なことだが、労働者の闘争を指導し、それゆえ真の意味で労働者を『代表した』運動と組織の歴史が、普通の人々そのものの歴史に代わることができる、と彼らは考えたのだった」[35]。同様に、もし、たんに中国共産党に協力的だった農民運動や労働運動の積極分子をもって大衆を代表させるなら、われわれは歴史の広大な領域に目を閉ざすことになるだろう。第一の（および第二の）モデルは、大衆を革命家集団の指導に対する敏感な共鳴版となる基本的に均質な存在、しかも受動的な存在とみなしがちである。この解釈図式は、大衆の果たした役割に敬意を表することを忘れてはいないが、つまるところ革命家集団の頂上部分から発せられる言葉によってすべてを説明してしまいがちである。

革命への参加という概念は、従来よりももっと広く捉える必要があるように思われる。例えば、革命を傍観し、やり過ごそうとした人々、革命に便乗してそこから私的な利益を引き出そうとした人々、革命を通じて社会的上昇を図ろうとした人々、革命の混乱のなかで私的な怨恨を晴らそうとした人々、家族の一人を革命陣営に、もう一人を反革命陣営に参加させて二股をかけていた人々、さらには自らが両陣営の間を往復していた人々――こうした人々もまた独自の意図と戦略をもって革命に「参加」し、革命のテンポや展開の仕方、衝撃の及ぶ範囲や方

向性に影響を与えたはずである。われわれは、このような人々をも十分に視野に収めて、さまざまな集団の戦略に開かれた空間として革命の現場を理解したほうがよいであろう。第一と第二の解釈図式は、このような革命家集団と大衆との複雑な相互作用を浮かび上がらせるには不向きなのである。また、そのような相互作用が、さまざまな地方的ヴァリエーションに彩られていたであろうことを示すにも適していないのである。

一方、第三の解釈図式は、革命家集団とその他の政治勢力、革命家集団と大衆、および革命家集団内部の諸関係のいずれについても一筋縄ではいかない複雑な関係を想定し、かつ革命の過程が多元的で地域的ヴァリエーションに富んだものだと想定しているために、多くの新たな発見が期待できるのである。この図式は、リクール(Paul Ricœur)が述べるミクロ歴史学の次のような利点をもっている。「……第一の利点は、強調点を個人、家族、あるいは集団の戦略に移動できることであり、その戦略は社会の最下層の行動主体があらゆる種類の社会的圧力、主として象徴的平面で及ぼされる圧力に服従する、という推定を疑問視することである。……社会の行動主体が服従するという推定がマクロ歴史学的尺度の選択と連携しているように見えるのであれば、ミクロ歴史学的選択はそれと逆の期待、偶然に左右される戦略への期待を起こさせる。その戦略では、不確実性の星のもとに、紛争と調停とが価値を増すのである」[36]。

もっとも、繰り返すが、それは革命の物語の着地点を見えにくくし、またその物語を無限に断片化してしまいかねないという代償を支払ってのことである(さらにいえば、現在の中国共産党政権の不興を買うという代償も覚悟しなければならない)。これらの解釈図式を採用する歴史家は、革命の物語を混沌のなかに投げ込み、そのなかで耽溺してしまいかねない。要するに、「全体史」の企てからは遠ざかってしまうのである(そもそも「全体史」の企てには向いていないのかもしれない)。それでも、このような代償が伴うことを自覚していれば、また革命過程がはらむ混沌にしばらく浸った後、再び「決算表」作成の問題に取り組む必要があることを自覚していれば、ま

だほとんど知られていない主題を見出す可能性に眼をつぶるよりはずっとましである。幸いにも、新たな資料状況は、第三の解釈図式の適用可能性を大いに拡大してくれている。

結局のところ、以上の検討は、当然のことであるが、どれか単一の解釈の体系に頼るだけでは、革命の復元が不十分に終わることを物語っている。われわれはトクヴィルが試みたように、連続の視点からする説明と断絶の視点からする説明、そして構造の物語と行為者の物語の間を不断に往復することでしか十分に包括的で、ニュアンスに富んだ革命像を作り上げることはできないだろう。

（1）一九八〇年代以降、中国で大量の資料集、年譜、大事記、職官表などが公刊されるようになった。こうした新しい資料状況を概観したものとして、安藤正士「中国近現代史研究の新潮流」、『東アジア地域研究』第五号（一九九八年八月）を参照されたい。

（2）どうやら、この状況は中国においても同様であるらしい。楊奎松「中共党史」、曽業英主編『五十年来的中国近代史研究』上海、上海書店出版社、二〇〇〇年、五八七―五八八頁。

（3）この小論を執筆するにあたり、大きな示唆を受けた文献が二つある。ひとつは、フランソワ・フュレ著、大津真作訳『フランス革命を考える』岩波書店、一九八九年、とりわけ第二部「三つの可能なフランス革命史」である。この小論のタイトルは、フランス革命史の異なる解釈の体系を扱ったこの著作に負っている。もうひとつは、T・スコチポル編著、小田中直樹訳『歴史社会学の構想と戦略』木鐸社、一九九五年、とくにスコチポルによる第一一章「歴史社会学における研究計画の新生と戦略の回帰」である。これもまた歴史社会学に可能な三つの研究戦略の輪郭を描いたものである。個々の人物や事件に関する研究史的回顧を別とすれば、中国共産党が関わった革命の歴史全体をいかに展望するかについて、フュレやスコチポルが行ったような過去の研究路線の概念化と再検討、そしてその基礎の上に立った再構築が、その膨大な個別研究の蓄積のわりには、これまでほとんど行われてこなかったように筆者には思われた。これがこの小論を執筆してみる気になった基本的動機である。

（4）アレクシス・ド・トクヴィル著、小山勉訳『旧体制と大革命』ちくま学芸文庫、二〇〇三年。

（5）トクヴィル、前掲書、七二―七三頁。正確にいえば、この文章は一八三六年に発表された論文「一七八九年以前

と以後におけるフランスの社会・政治状態」の一節である。E・H・カーによれば、トクヴィルやアルベール・ソレルのような保守的な人々が革命における連続性の要素を強調する傾向にあるというのだが、この指摘の当否はここでは問題にしない。E・H・カー著、南塚信吾訳『ロシア革命の考察』みすず書房、一九九〇年、七頁。

(6) フュレ、前掲書、二五〇頁。

(7) トクヴィル、前掲書、一二七頁。この引用文は、英語版を参照して表現を変えてある。Alexis de Tocqueville, translated by Alan S. Kahan, *The Old Regime and the Revolution* (Chicago: University of Chicago Press, 1998), p. 106.

(8) フュレ、前掲書、二九一頁。

(9) L・A・ブランキ著、加藤晴康編訳『革命論集（改訂増補版）』彩流社、一九九一年、一四九頁。

(10) この表現は、I・ドイッチャーから示唆を得ている。I・ドイッチャー著、山西英一訳『ロシア革命五十年――未完の革命』岩波書店、一九八七年、一九頁。

(11) ハンナ・アーレント著、志水速雄訳『革命について』筑摩書房、一九九五年、五八頁。Hannah Arendt, *On Revolution* (New York: Viking Press, 1963), p. 42.

(12) アーレント、前掲書、四六頁。Arendt, *op. cit.*, p. 34.

(13) フュレは総決算という表現を用いている。フュレ、前掲書、三一頁。

(14) フュレは起源を「原料と担い手」と言い換えている。フュレ、前掲書、五八頁。

(15) 革命過程が一般的に辿る諸段階の概念的整理に関しては、中野実『革命』東京大学出版会、一九八九年、二〇―二一頁を参照されたい。

(16) その論争のひとつは、いうまでもなく「永続革命」の理論をめぐるものであった。歴史的発展における客観的諸条件を重視する立場からすれば、資本主義から社会主義への間髪を入れない移行、すなわちブルジョア革命からプロレタリア革命への中断なき発展としての「永続革命」は不可能となる。というのも、ブルジョアジーが資本主義を高度に発展させるまでは、プロレタリア革命は望むべくもないからである。一方、政治的行動がもつ力に大きな信頼を寄せる立場からすれば、少数のよく訓練された陰謀者的組織の断固たる行動を通じて、ブルジョア革命の段階から一

足飛びにプロレタリア革命の段階に至ることが可能となるはずであった。興味深いことに、史的唯物論に立つはずのマルクスもまた、一度は後者の観点、すなわちスタンレー・ムーアのいう「少数者革命の戦略」に立っていたという。スタンレー・ムーア著、城塚登訳『三つの戦術』岩波書店、一九七二年、三―三八頁。

(17) 「事件の必然性と時代の断絶」とは、フュレが「ブルジョア革命」の概念を特徴づける際、用いた表現である。フュレ、前掲書、三八頁。

(18) 中共中央党史研究室『中国共産党歴史』上巻、上冊、北京、中共党史出版社、二〇〇二年、第一章および第二章。

(19) 中共中央党史研究室一室編著『《中国共産党歴史（上巻）》若干問題説明』北京、中共党史出版社、一九九一年、一―二頁。

(20) 同右、二〇六頁。

(21) 念のために付け加えておけば、I・ドイッチャーが述べるように、トクヴィルは革命の独創性を過小評価したかもしれないが、革命の必然性を否定しているわけではない。ドイッチャー、前掲書、一五頁。

(22) フュレ、前掲書、二七頁。

(23) 安井三吉「毛沢東の孫文・三民主義観」、藤井昇三・横山宏章編『孫文と毛沢東の遺産』研文出版、一九九二年、二三一頁。

(24) 同右、二三九―二四一頁。

(25) 張海鵬「辛亥革命を記念する政治・学術の意義」、孫文研究会編『辛亥革命の多元構造』汲古書院、二〇〇三年、八―九頁。

(26) 〝従五四運動到人民共和国成立〟課題組『胡繩論「従五四運動到人民共和国成立」』北京、社会科学文献出版社、二〇〇一年、三五―三六頁。

(27) 同右、五頁。

(28) 張海鵬、前掲論文、一一頁。

(29) Maurice Meisner, “China’s Communist Revolution: A Half-Century Perspective,” *Current History*, September 1999, p. 248.

(30) 溝口雄三「再考・中国革命」『大航海』第三一号（一九九九年一二月）、一一六―一一九頁。彼のパースペクティヴにおいては、一九四九年は画期としてはほとんど意味をなしていない。ともあれ、二百年にもわたって継続する「事件」を革命と呼ぶのは、意味論的な許容限度を超えているように思われる。

(31) さらにいえば、この解釈図式は、もし孫文が辛亥革命で打ち立てたブルジョア民主主義的共和国が生き延びていれば、そしてもし蔣介石の国民政府が改革をもっと徹底していたなら、中国は中国共産党が民衆に強制的に支払わせた代価を支払う必要もなければ、政治的暴力とそれに伴う混乱や飢餓や低い生活水準に耐える必要もなく、いちはやく強大な工業国へと成長を遂げていただろう、という議論に道を開く可能性がある。

(32) Kathleen J. Hartford, "Step by Step: Reform, Resistance, and Revolution in Chin-Ch'a-Chi Border Region, 1937-1945" (Ph. D. dissertation, Stanford University, 1980). Chen Yung-fa, *Making Revolution: The Communist Movement in Eastern and Central China, 1937-1945* (Berkeley: University of California Press, 1986). 筆者自身の研究も、おそらくこの第三の解釈図式に当てはまるであろう。もっとも、筆者は共産党が苦労の末に成し遂げた旧社会との断絶が、実は中途半端なものであり、その結果、連続面と断絶面があたかもコラージュ（貼り合わせ）のように入り混じっていることを強調している。その意味で、筆者の立場は第三モデルと次に述べる第四モデルの中間に位置づけられるかもしれない。

(33) Hartford, *op. cit.*, pp. 650-52.

(34) そのような著作の例として、歴史家による著作とはいいがたいが、蔣介石『中国のなかのソ連』（寺島正訳、時事通信社、一九六二年）をあげることができる。この書物を開けば、いたるところに「コミンテルンの陰謀」や共産党の唱える平和共存による「武装闘争のカムフラージュ」、共産党の土地分配による農村プロレタリアートの「欺き」といった言葉を見出すことができる。

(35) エリック・ホブズボーム著、原剛訳『ホブズボーム歴史論』ミネルヴァ書房、二〇〇一年、二九二―二九三頁。ただし、原文を参照して表現をいくらか変えてある。Eric Hobsbawm, *On History* (London: Weidenfeld & Nicholson, 1997), pp. 269-270.

(36) ポール・リクール著、久米博訳『記憶・歴史・忘却』（上）、新曜社、二〇〇四年、三三二頁。